参考資料

第５回福井県高等学校教育問題協議会　議事録

□日　時　　平成２０年　３月２１日（金）　　１４：００～１６：００
□会　場　　福井県自治会館　２階　多目的ホール
□出席者　　委　　員：金井委員、清川委員、四戸委員、杉田委員、瀬尾委員、津田委員、馬場委員、福田委員、藤井委員、藤田委員、山﨑委員、吉岡委員、吉川委員、吉田委員、渡辺委員（１５名、五十音順）
オブザーバー：県高等学校教職員組合　鈴木執行委員長、県教職員組合　高嶋副執行委員長、県中学校長会　堀田会長、県高等学校長協会定時制・通信部制部　矢崎部会長、県高等学校長会　吉田会長（５名、五十音順）
□事務局　　広部教育長、伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹（学校教育）、山内教育政策課長、中島高校教育課長

○開　会

教育政策課長　　定刻になりましたので、ただ今から、第５回目の「福井県高等学校教育問題協議会」を開催いたします。なお、本日、委員の御出席については、少し遅れて来られます方もおられますが、１５名の方の出席でございまして、全委員１８名の過半数に達し、会議が成立しておりますことを御報告申し上げます。
それでは、開会に当たりまして、広部教育長からごあいさつを申し上げます。

○あいさつ

広部教育長　　本日は、年度末のお忙しい中、第５回目の「福井県高等学校教育問題協議会」に御出席を賜り、厚くお礼を申し上げます。前回におきましては、職業系学科の望ましい在り方について、これまで委員の皆様方からいただきました御意見を取りまとめ、さらに追加的な御意見をいただいたところでございます。また、併せて、次のテーマであります「地域の実情を踏まえた望ましい高校の規模および配置」について議論していただき、委員の皆様から、望ましい１学級当たりの生徒数、１学年当たりの学級数、県内各地区における高校の配置等について貴重な御意見をいただきました。今回は、前回に引き続き、望ましい高校の規模と配置について議論を深めていただくとともに、これまでの議論を踏まえ、本県において今後求められる高校の姿について、具体的な御意見・御提案をいただきたいと考えております。なお、昨年１２月の諮問の際に、今後の県立高等学校の目指すべき方向性について、今年度内を目途に答申をいただきたいと申し上げたところでございますが、今回の諮問内容は、生徒一人ひとりの将来につながる重要な課題でございますので、なお、十分に御議論賜りたいと思います。今後も、様々な観点から十分な検討をしていただきまして、目途といたしましては、来年度のできるだけ早い時期に答申をいただきたいと考えております。教育委員会におきましては、答申をいただいた後、社会情勢の変化に的確に対応し、生徒一人ひとりの個性や能力を最大限に伸ばすことができる教育環境を整備するため、地域の実情を踏まえながら、具体的な検討を行っていきたいと考えております。今後とも、本協議会での議論を進めていただく中で、皆様方それぞれのお立場から、幅広い御意見をいただくことお願い申し上げ、一言御挨拶とさせていただきます。どうかよろしくお願い申し上げます。

○議　事

教育政策課長　それでは、議事に移らせていただきます前に、資料の御確認をお願いしたいと思います。本日の会議次第、委員の名簿、会場の配置図、それから諮問文をお付けしてございます。次に、資料１としまして、「第５回高等学校教育問題協議会協議資料」、次に参考資料１としまして、「地域の実情を踏まえた望ましい高校の規模および配置」について、これは前回お渡しした資料と一緒ですが、１０ページに少し資料を追加しております。また、参考資料２といたしまして、第４回の議事録をお付けしております。次に参考資料３「参考データ・事例集」といたしまして、全国の総合産業高校と総合技術高校の設置状況などを調べて一覧表にしたもの、これは前回もお付けしておりますが、再度お付けしております。最後に、山﨑先生から他県の事例等について資料を用意していただきました。Ａ３用紙で１枚、別途お付けしております。以上よろしくお願いします。

それでは、以降の議事進行は、福田会長にお願いしたいと思います。福田会長よろしくお願いいたします。

福田会長　それでは、早速議事に入らせていただきます。まず、事務局から、前回の会議における意見・提案等の要旨を説明いただいてから、皆様の御意見を頂戴したいと思います。では、事務局お願いいたします。

高校教育課長　よろしくお願いいたします。それでは、資料１「第５回福井県高等学校教育問題協議会　協議資料」を御覧ください。

１ページから３ページに亘りまして、第４回までにいただきました御意見・提案等の要旨を記載しております。「現状と課題」のところに、アンダーラインを引かせていただいておりますのが、前回いただいた御意見でございます。基本的には、基礎学力が身に付いていない生徒がいるなど、生徒数が減少する中での課題が記載されておりまして、職業系高校でプロフェッショナルを養成しても、なかなか就職先・社会的な受け皿が十分でないという問題があるという御意見をいただきました。職業学科の在り方につきましても、基本的には、生き方とか職業観を育み、基礎的・基本的な知識・技術を習得することが非常に重要だという御意見をいただきました。学科の分け方につきましては、社会の多様化に対応するため、従来の農業・機械などのような領域的な分け方から、農業システムとか商業マーケティングなど、いわゆる機能に着目した分け方を検討したらどうか、また、福井県の特色を生かしたスペシャリストを養成することが必要だという御意見をいただきました。

２ページを御覧ください。基本的に一番大事なことは、生徒に誇りと自信をどう持たせるかということですが、地元企業等のバックアップもいただきながら、生徒が自分たちで作ったものを商品化・販売するような実践的な教育が必要だと。また、「産業界や大学との連携」を考えるに当たっては、教員が地元の企業や研究機関等に研修に出向いたり、また、研究機関の研究者やあらゆる分野のプロの方々が授業を行うなど、教員と生徒の両方の側からの連携の在り方を考える必要があるという御意見をいただきました。さらに、各職業系学科の望ましい在り方ということで、商業・工業・農業・水産・家庭・福祉それぞれの学科に関する御意見をいただきましたが、水産について、北陸三県の高校が連携した取組みが考えられないかといった御意見をいただいております。

４ページをお開きください。「地域の実情に応じた望ましい高校の規模および配置」についての論点１で、教育効果を高めるためには、どの程度の学校規模が必要か、１学級当たりの生徒数、１学年当たりの学級数はどうかという議論をいただきまして、特に１学級当たりの生徒数につきましては、いわゆる標準法では

４０だが、３０から３５人くらいが適当ではないか、また３６人がよいという御意見と、いわゆる職業系の場合には、一律に考えるのではなく、普通科系より、更にもう少し人数を少なめにした方がいいのではないかというような御意見もいただきました。次に、１学年当たりの学級数につきましては、４から８くらいがいいのではないかという御意見を多数いただいた中で、小さくても光る学校がある場合には残した方がいいのではないか、というような御意見もありました。しかし、一方では、そういう学校においては、部活動等も含めて、いろんな選択の可能性が非常に狭まるという問題点の指摘があり、５から６学級、または６、７学級辺りが一番いいのではないかという御意見もありました。学校や地域の特色を考慮して、多少の差はあってもいいのではないか、そういうことも大切ではないかという御意見もありました。

６ページを御覧ください。論点２といたしまして、「県内各地区における全日制高等学校の配置はどうあるべきか」ということで御議論をいただきました。基本的には、生徒数の減り方が大きい奥越・嶺南の議論がなされました。その中で、どのように統合をしていくかという議論も少し具体的になされまして、教員の移動は可能であるが、生徒の移動は非常に難しいというような御意見をいただきました。また、生徒の多様な学習ニーズに応えるために、外部講師などを利用すると、複合的というか多様なものが学べるのではないかという御意見をいただきました。また、統合というようなことを考える場合にも、生徒の通学や距離なども十分に配慮する必要があるのではないかというような御意見もいただきました。簡単ですが、以上でございます。

福田会長　どうもありがとうございました。説明にあったように、今まで随分いろんな意見を賜りました。しかしながら、先ほど教育長のあいさつにもありましたように、生徒たちにとっては、非常に重要な問題を含んでいることを議論しているわけでありまして、できるだけ夢のある、また、生徒たちにとっても、できるだけいい案をここで提示できることが最も重要であろうと考えます。そこで、本日は、まだ足りない部分の御意見等を積極的にお伺いしたいと思います。前回の論点１、論点２というように特に分けずに、両方に関しまして、何か追加的な御意見、また根本的に今までに議論は間違っている、こういうようにやるべきであろう、という御意見の提示でも構いません。どうぞご自由に、遠慮なく御意見をおっしゃっていただければと思います。

金井委員　論点１、論点２、両方に関係することではございますが、１回目から４回目までのこの会議の議事録を詳細に読ませていただき、また、私自身も出席させていただいた会議を振り返ってみました時に、まず絶対的に、この福井県におきましても、学童人口がどんどん減少していくというような中で、県立高等学校の規模、１クラスごとの規模あるいは配置をどうすべきか、ということをこれからも論じていかなければならないのだとは思いますが、それを論じるに当たりましては、中学校の生徒さんがどういう進路をとられるか、つまり、進学されるに当たって県立高等学校に進学される生徒さんもおられれば、県内の私立高校に進学される生徒さんもおられる、また県外の高等学校に進学する、あるいは、海外への進学というものも今後十分考えられるわけであります。しかし、県外あるいは海外への流出というのは、今後考えられるとしても、おそらくわずかな数だろうと思われ、大きく分けますと、県立そして県内の私立高校へ分かれるというのが現状だろうと思います。

今後の県立高校の規模、クラスの生徒数というものを考える時に、この県内私立高等学校への進学者数というものを横に置いて考えを進めるわけにはいかな

いのではないだろうか、ということでひとつ御意見として申し上げます。平成１９年度の全日制高等学校の入学見込数が、７，７００余名。県立高校へは約５，８００名、そして私立高校へは１，８００強の生徒さんが進学されております。現在、福井県内の全日制私学の生徒数の割合は２３．６％という数でございます。しかし、全国で見たらどうなのかと申しますと、私学が非常に強いとされる東京あるいは京都をみますと、実に東京においては、５９．６％が私立で占められている。また、京都におきましては４１．１％という非常に高い数で私立高校生が占めているわけであります。一方、少ないところはどうなのかと申しますと、全国４７都道府県のうち、４７位が徳島県でございまして、こちらは４．７％、４６番目が沖縄県の５．３％。こういった上位あるいは下位の特殊な要素を除いて算定した私学の比率というのが、平成１９年５月１日現在で、これは学校基本調査の速報でございますけれども、２８．１％という数であります。

現在私立５校、全日制全て合わせますと総勢２，０００名の１年生の入学定員を持っているわけでございますが、将来的には、全体的な学童人口の減少に伴って減らしていかなければならないとは思っております。しかし、この平成１９年度の１，８５０という数をベースとして考えていった時に、恐らく平成３１年度には、県立７２％、私立２８％という、今日における全国的な平均値が出てくるのではないかという算定をいたしておるところでございます。実は、この計算の根拠には何があるかと申しますと、この高等学校教育問題協議会とはまた別に、福井県公私立高等学校連絡協議会といった、非常にフォーマルな会議がございますけれども、前回行われましたのが、昨年の９月８日ですが、こちらの会議でも、公立高校と私立高校との定員の話し合いの中で、私学においては全体として約３０％を目指したいという意見を私学側が提示いたしております。是非とも、この県立高校の規模をどうするか、果たしてどこが適正な規模なのか、またどういったクラスの人数配置が適正であるのかということを考慮する上で、私学に対する進学者も考慮に入れた検討を是非お願いしたいと思うわけでございます。

福田会長　　どうもありがとうございました。ごもっともな御意見だと思います。私学は私学なりにそれぞれ特徴のある教育をなさっていると。むしろ、県立ではなかなかやれないような、思い切ったことでも計画して実行することも可能なわけですから、そういう理想に燃えた教育を私学が実施しているということは、逆に県立高校にとりましても大いに刺激になって、カリキュラム改訂や教育のやり方など、あるいは教員自身の教育であるとか、いろんな意味で相互に刺激し合う、いい関係をこれからも構築していくべきであろうというように思います。

しかしながら、これは規模も違いますし、数も違いますので、直接参考にして議論を進めるということが必ずしも容易でない場合も多くありますので、そういうことも脳裏に描きながら、以後の議論を是非やっていきたいと思います。必ずしも全部にいきわたるか、ちょっと議長としても自信がないところがありますが、そういう時には、御意見・御指摘等ございましたら、よろしくお願いいたします。その他に、今までの意見、今の金井委員の御意見も含みながら、御意見はございますでしょうか。

杉田委員　　公私立の役割分担というのは、非常に大事な問題だと思います。確か前回の高問協においても、その役割をどうするかというような話が常に活発に出ました。むしろこういう席で、各学校の特徴を今後出していくという中において、やはり「私立はどんなことを考えているのか」というような意見が、中にひとつくらい出てきても、参考にさせてもらっていいんじゃないかというように思います。

それと、これまでの高問協の意見のベースが、従来の形に追従すると、「これ

までこうだったから、どこか一部を合わす」という形に来ているんですけども、やはり、魅力的な高校・学科をどうするかということを考える場合に、かなり思い切った学科の魅力を出すための知恵を出していかないといけない。具体的な考えがあるかと言われると、私にはあまり知識はないんですが、やはり「これからの子どもたちにとって魅力的なもの、それは何か」というような議論をもう少し深められたらいいんじゃないかなと思います。どうしても、大枠の話が中心になったり、各地域の話が優先してしまうところがありますので、もう少し県全体としての魅力ある学科、今何が必要なのかということが重要なんじゃないでしょうか。そういう意味では、私立高校が非常に頑張ってやっておられるというような考え方もひとつの参考になるんじゃないかなと思います。

福田会長　　ありがとうございました。非常に貴重な御意見だと思います。確かに、今、５年後、１０年後、１５年後というようにデータが出ており、非常に切羽詰った問題でありまして、「対応をどうするか」ということが目前に迫られているという焦燥感がありますので、どうしても話が小さくまとまりがちなところは、確かに否めないと思います。そうではなくて、杉田先生の御指摘のように、もうちょっと大局的な立場に立って「高校の教育、あるいは、中・高・大学というラインに立った上での高校の教育というものがどうあるべきなのか」、それから何回も出ております「本県の特徴を生かして」というキーワードがありますが、「『本県の特徴を生かす』とはどういうことなのか」というようなことの詰めとかですね。確かに表面的なことだけで終わってしまっているという部分もあろうかと思いますので、今日は、ちょっと時間を取りまして、そういうところを補った議論を賜りたいと思います。

議長からちょっと差し出がましいですが、以前水産関係の話が出ました。これは「北陸３県でもって１つの水産学校にしてはどうか」というような御意見も出ました。それから県立大学水産資源学科、新しく学部化されたと思うのですが、こういうものと現在の水産の高校との高・大連携というものも、ちょっと話題に上ったこともございます。現在、高・大連携ではなかなか難しいかもしれないけれども、それを可能にするためには、どのようにしたらいいのか。また、農業高校が嶺北に２校ございますけども、だんだんと人数が減ってきている。これを、例えばエコ、バイオテクノロジーというようなキーワードが当てはまって、２校を統合したようなですね、全く新しい拠点が作れないかとか、考えればいくつかのアイデアというか、実現可能かどうかは別にしても、いろんなお考えを賜れたらというように思っております。そういう気楽な意味で、ある意味では無責任とも取れる発言でもかまわないと思います。無責任の背後には夢があると思いますので、その夢を語っていただきたいと思います。瀬尾先生いかがでしょうか。

瀬尾委員　　農業関係ですけれども、坂井農業と福井農林とを統合して、拠点校ということで、農業スペシャリストを育成していただきたい。また、福井県は今、食育の発信県ということで頑張っておりますが、食に関しての学科が福井・坂井地区のほうにはないんですよね。食育、食育と言っている県の中心地で、高等学校に食に対しての学科がないというのはやはり寂しいことであると思いますので、併せて食に対する学科を作って、農と食、地産地消ということで、拠点校を作っていただきたいとは思います。

福田会長　　ありがとうございました。食育というひとつのテーマがあるだろうということですね。食育というと、どうしても私たちは、嶺南の方を思い出します。御食国など、嶺南の方が盛んですよね。「嶺北には食はないのか」という気持ちは出て

きますので、今のそのお言葉はキーワードとして、やはり嶺北にも、この食育というテーマを持った学科もあってもいいのではないかということです。広い立場から、マスコミの立場から御覧になりまして、四戸先生いかがでしょうか。

四戸委員　今、お二人の発言があったのですが、学科の再編とか、そういう中で、農業高校とか工業高校についてですが、農業高校、工業高校ができた当時とは、現代の社会的ニーズはかなり変わってきているのだろうと思うんですね。ですから、例えば、今、福田先生もおっしゃったように、環境系の学科とかですね、それから情報系とか、これから更に２１世紀進んでいく中で、特に専門教育というのは大学に行ってからやってもなかなか難しいわけですが、高等学校で難しい専門教育を教えるよりも「そういうものをどうして学ばなければいけないのか」というような、いわゆる時代のニーズみたいなものに対する教育を行うという意味での高等学校が必要なのではないかと。今までの学校の在り方を考え直して、今のニーズは何かということをもうちょっと議論してもいいのかなと。そういう意味では、私立高校さんにはもっと新しい学科などを導入していただいて、チャレンジしてもらいたいと思います。公私のバランスというのは何パーセントがふさわしいのかというのは、これはなかなか難しいです。これは歴史的な背景の中で福井県の場合２３パーセントとなっていて、これが２８パーセント、３０パーセントというところがふさわしいのか、その辺も含めて議論して、やはりバランスのとれた公私の教育体制というものも考えてもいいのかなと思います。

福田会長　やはり、その時代の要請に合った、バランスのとれた教育内容ということが大切であろうということですね。清川副会長は、以前「実際に高校で教えている内容と、現在の社会的ニーズの間に隔たりがある」ということをおっしゃったと思うんですが、今議論をずっと続けてきた中で、どのように考えたらいいのか、まとめてお話いただけますでしょうか。

清川委員　先ほど食育の話が出ましたけれども、ある職業高校に２回くらい講演に行ったことがあります。その時に先生方と話をする中で、「野菜を作り、食物科があって料理を作りながら、どうして高校生から調理師の免許を持った者が出ないんですか」とお尋ねしたところ、「それは専門学校がありますので」と。専門学校が調理師を教えるという意味がわからないのですが、調理をするため、調理して商売したりするためには調理師の資格はいらないんですね。そういうものを作り、ものを加工する学校でこそ、そういう調理師科があって出てくると、おそらく、職業学校という、農業にしろ、食物科にしろ、それによってその専門の仕事に就く生徒さんが増えてくるのではないかと思うんですけども、何かバラバラにやっている関係上、せっかく学校に行ったにも関わらず、その仕事に生かされないというのが実情ではないかなと。金井委員のところは、高校の時から連携を考えていただければ専門学科に進めるというということで、その点は上手くできている。県立ではそういうことが出来ませんので、やはりそういった何か、卒業した子が高校で学んだことを生かせる仕事に就けるというお膳立てがこれから必要になってくるのではないかなと思いました。

福田会長　高校を卒業して何かの資格を取るということがやはり大事だというお考えなんでしょうか。

清川委員　その後、長く続けばいいんですけどね。もし続かない生徒さんが多数おられるとしたら、「それなら学校に何で３年間行ったのか」ということになります。そ

ういう資格を持ちながら、せっかく取った測量士なり、測量士補なり、調理師なり、いろんな高校で取れる資格を、精進しながらせっかく学んだことをどう生かしていくかというのを考えた方がいいのではないかと。物差しで合わせて学校に行って、卒業したら全然違うところというのは寂しいような気がしますので、何かそういうようなことも必要ではないかと思いました。

福田会長　　どうもありがとうございました。他にどうでしょう。

津田委員　　前回の会議の終わりの方で、介護福祉士の国家資格は３年間では取れないという問題が出ましたが、「本当にとれないのか」と気になりました。県立では、今のところカリキュラムの整備や実習場所の確保などの問題が非常に大きく、そういう問題を考える必要があると。今、県立には大野東に福祉教養科、これが県内唯一なんですね。奥越がいいとか悪いとかではなく、もっと子どもが通学しやすくするというか。この介護福祉士というのは、前回も「なかなか厳しい」と言われましたが、やはり将来のニーズは高いという現実の中で、若い生徒たちがそういう資格をなるべく３年間で取れる工夫はないかと考える時に、子どもたちが通学しやすい、いろいろ考えはありますが、将来を見た時に、やはり通学しやすいところ、子どもが集まりやすいところに、そういうような学校を持ってくる必要があるのではないかというように考えます。

福田会長　　わかりました。これから少子高齢化がますます進んでいくわけです。特に高齢化が進んでいく。やはり介護福祉士等の需要は増えてくるだろうと。その場合に、やはりロケーションというか、場所が、福井県全域から行きやすいようなところを考慮すべきじゃないかと。そうすれば、もうちょっと優秀な人間がその介護福祉士の資格を目指して、そこに来る可能性があるのではないかという御意見かと推察したんですが、それでよろしいでしょうか。ロケーションにも関係しますし、あまり意見は出ませんでしたけども、介護福祉科等の重要性についての御意見だと思います。

吉岡委員　　今のお話で、例えば高校３年間で資格が取れないということであれば、より自由な発想で、４年目の選択が出来るとかいうことで、１年間延長させてもらえるなど、自由な取組みが出来るようなことも考えられないかなと思いました。例えば、大学ですと、もう１年間勉強したいということで留年する方もおられると聞いていますし、そういうようなこともいいんじゃないかなと。

それから、やはり親の立場からすると、学校に魅力が欲しいというか、普通科高校ではなくて職業系であるから、３年間勉強したことによって、例えば資格も取れるし、職業系の学校でも次の進路、大学にも十分行ける学力を付けることが出来る、それから、例えば「こういった企業に就職したり、こういった資格で、こういう仕事をしている」そういったことをどんどんアピールしていただけるような、何か学校自身の魅力を発信していただけるといいのかなと。

この間、坂井農業高校で、担当の先生の方から鶏の燻製をいただきまして、その先生に、この学校にはもともとコシヒカリを作られた先生が居たんだとか、そういう燻製を作ったという話を非常に目を輝かせて語っていただきまして、私としても、外から見ていると、農業高校はいまだに農業だけなのかなというイメージを持っていたんですけれども、そうではないということが分かったような気がしましたので、是非ともそういうことで何か取り組んでいただけたらと。

それと、前回の時に、１クラスの人数はどうかという話もありましたけれども、職業とか、普通科ということを考えると、学科によっては別に３６とか３０人と

かいうことにこだわる必要がなく、少人数の学科が来てもいいのかなと。ちょっと前回と話が違いますけれども、そう感じた次第です。

福田会長　　どうもありがとうございました。資格を取るために高校の在籍期間を延長することはどうなんでしょうか。設置規準上簡単にできるんでしょうか。事務局どうですか。例えば高校は３年制と決まっていますよね。これを４年制にするということは、県の独自の判断でできるんでしょうか。私は難しいんじゃないかなと思うんですが。

高校教育課長　　小浜水産などには、２年の専攻科がありまして、そこで海技師の３級を取っております。

福田会長　　要するに、３年を４年に延ばすことも可能であるということでしょうか。

高校教育課長　　高校に４年制というのはございません。

福田会長　　例えば、福祉科とかいろんな学科で、３年で資格が取れなかったら、１年延ばして４年にして資格を与えるということも考えてはどうかというフレキシブルな意見だと思うんですが。

高校教育課長　　専攻科という形で新たに、という形を取ることになります。

福田会長　　専攻科という新しい形を取ればできるということですね。どうぞ。

藤井委員　　前にも同じような意味のことを申し上げたと思いますけれども、確かに、時代に合うような、魅力ある高校づくりを進めていくことは大事だということはよくわかりますが、ただ、今の産業界が求める、社会が求める、生徒にも魅力があるというようなものを早急につくりうるかというと難しいのではないか。そういう学科名をつけてそういう教育が行われるわけでもございませんし、あくまで教えていかれるのは教員の方々でございます。そうすると、現在いらっしゃる方がそういう方向に向けて、御指導されることになるんですけれども、新しいものであれば、新しい教科なり内容を指導される教員の方を採用されていくということになるんでしょうけれども、これからどんどん生徒数が減っていく中で、退職されたような方々と同じくらい採用できるかというと、これはまた難しいということになります。そうなると、看板だけ立派で内容が伴わないというような懸念もあるのではないかなということも思います。

それで、以前から申し上げていますように、もう少しやはり、県立の高校においては、基本的な職業人の在り方であるとか、基本的な技術者の在り方であるとか、もっと基本的に、人間としてどうかというようなことを、具体的に何かの分野でそれを指導するわけですけれども、指導する分野以外にも進んで、それが有効に生きるような、そんな教育を目指していかないと、なかなか現実的には難しいのではないかなということも思っています。以前にも、もう少し広いというか、そういう考え方の中で考えられないかなと思ったのは、そういうことも踏まえて申し上げたわけです。ちょっと消極的な考えかもしれないんですけれども、そういった面を持たないと、なかなか進めていくのは困難ではないかと。そういう面も多少考慮に入れていかないといけないのではないかと思います。

福田会長　　どうもありがとうございました。いろんな理想論を言うことは、それなりに重

要であるけれども、やはり地に足をつけた議論が必要であろうというように言い換えることができるかと思います。結局、実際に新しい学科等を設置した場合の教員の獲得と、教える側の整備、体制の整備というものがそう簡単にいくかどうかというようなところに問題はあるという御指摘ではないかと思います。夢と現実の間の橋渡しというのはなかなか難しいことが多くございます。しかしながら、今日申し上げたように、そういうことも意識しながら、なお一方では夢と申しますか、こんなことができたらいいのに、というものがあれば、遠慮なく挙げていただきたいと思います。吉田委員いかがですか。

吉田委員　今、お話を聞かせていただきましたが、高校受験した方々のいろんな話を聞きますと、子どもたちが望んで福井の進学校に進む場合、親のエゴで押し付ける場合、中学時代の友達と一緒に同じ高校に行きたいという場合と色々ある中で、福井の進学校へ入学して、中学時代は１，２番でずっと通してきたのが、同じような点数の方々の中でやると、何番から何番までという順位を見ることによって、学校に行くのが少し嫌になった子どももいるということです。高校進学において、自分が本当に行きたいところを選んで行っているのかどうか。子どもたちが素直に職業系を受けて、親の言うとおり受けて受かったからよかったけれど、今後どうなるんだろうというようなことを最近よく聞きますので。子どもたちの数が少なくなっていく中で、学校の統廃合、職業系学校がこのようになったらいいというような、ここでなされている話はよく理解できますけれども、子どもたちの気持ちはどのようになっているのかというようなことを、最近、入学試験が終わったあとに、地域でそういう話がよく聞きますので。子どもたちが歪まずまっすぐ自分の目的に沿って進んでいけるコースを選んで進学したのかなということをちょっと思います。

福田会長　ありがとうございます。これは第１回目の討議のときにそれが非常に問題になりました。中学校から高校に入って、一体いつ、ちゃんと自分の進路を決定できるのかと。自分の進路の決定までの猶予期間が一体どの程度あるのかというような問題がかなり議論されたことがございます。それは、解決のつかない問題として、今はまだペンディングになっているんじゃないかと思います。確かにおっしゃるように、高校には合格したけれども、本当に自分たちが好きで選んだのかどうかという迷いは常に残ることは残るわけです。ところが一方では、やはり各職業高校は、非常に厳しい言い方をすれば、ひとつはプロフェッショナリティを養うところでもある。だから、両方の要素がそこに入ってきて、一体どの程度の余裕が残されているのかと。従って、職業高校に行っても、やはり進学したいと。それはその職業の延長上にある、例えば専門学校とか、関連の学部等に進学したいという人と、あるいはまったく別の分野に進学したいという人と、いろいろおられると思うんですね。今度は次の問題として、進学する人と就職する人がひとつのクラスの中に混在している、そういう問題についても討議いたしてまいりました。いろんな問題の提起がありましたけれども、依然としてそういう問題が現実としてあると。人数が少なくなってきた場合は、特に大きな問題が起こってくるというようなことが指摘されたところでございます。今、吉田先生が御指摘になったことは、今まで議論してきたことの総まとめみたいなものですね。これはやはり依然として問題として残るのではないかなと思います。渡辺先生いかがですか、今の問題につきまして。

渡辺委員　今おっしゃったとおりだと思います。中学校でも進路の指導はしておりますけれども、自分の進路の希望通りにいく子・いかない子がいるわけですので、それ

ぞれ職業系高校、普通科系高校行っても、そこでまた改めて自分の進路をさらにどうするかを考えなくてはいけません。やはり、中学校は中学校としての責任として進路の指導をしますし、高校は高校として、職業系学校は職業系学校として、それぞれの生徒が進学するのか、あるいは就職するのかというところの土台作りというようなものをしっかりしていかないとだめだなというようには思うんですが、今おっしゃった問題を解決しようと思っても、ちょっとそれは難しいかなと思っております。

話は変わりますけれども、そういう土台作りの中で、例えば職業系の学校であるならば、皆様の議論の中でも出てきましたように、農業系は農業系、商業系は商業系、工業系は工業系として、福井県の特性といいますか、地域の特性というようなものを学科の中に織り込んで、それぞれが特色を出して生徒に提供できるような、ひとつの柱みたいなものがあるといいかなということも、議論の最初から思っておりました。

福田会長　ちょっと難しいことですが、具体的には、どのようにお考えですか。

渡辺委員　例えば農業系であるならば、今の福井県の農業の在り様の中で、何が特性として出せるのかということですけれど、米なら米、コシヒカリならコシヒカリについて何か打ち出せるものといいますか。工業系なら工業系の、ものづくりならものづくりの何か、というようなものが打ち出せる学科というか、そういうものが新鮮な度合いで出せたらな、というようなことを思っているんですが。

福田会長　先ほども申しましたように、県の特徴を出すと一口で言いましても、これはやはり、かなり難しい部分が多いと思います。一口で言ったらなるほどと思うんですけれども、実際に具体的にどんなところが県の特徴だと聞かれると、ちょっと詰まってしまうところがあると。キーワードにしても、県の特徴を生かしていくということは、例えば、織物や眼鏡産業もありますし。特に清川委員は、以前から工業といったら、やはり機械と電気とが主ではないかというようなことをおっしゃいました。もし県の特徴を出そうとすれば、例えば原子力関係の工場だとかいうようなものも、県に１５基も原子力発電所を備えているわけですから、安全を守るための工学、工業ということも入ってくるかもしれません。そういうことを考えますと、清川委員どうでしょう。

清川委員　確かに原子力発電のことをいいますと、ここ２，３年で福井工業大学も福井大学も原子力関係の講座といいますか、学部ができたということで、卒業生が出る時分には、おそらくかなりの生徒さんが採用されるんだと思いますけれども、高校にも、実験や高度な技術でなく、もう少し学習する機会があってもいいような気もいたします。我々の会社でも、原子力の産業廃棄物、それから金属に付着したエックス線等をどう除去して、どうもとの金属に戻せるかというテーマで相談に乗ってくれないかとか、予算をこれくらい付けるので、もう少し検討していただけないだろうかというお話があります。そういう問題はおそらく高校としても取り組んでもいいような問題だろうと思いますので、そういうことも今後は必要じゃないかなと。今、原子力にも廃炉の問題も出てきますので、その部分においても、高校生としてのやるべき、学ぶべきことはたくさんあると思います。

福田会長　ありがとうございました。今ちょっとお話が出ましたが、ふげんの廃炉の問題。当然これは１０年２０年、長きにかかってやるわけですが、実際に働いている方は県外の方が多く、福井の地元からの参画がずいぶん今までは少なかったという

ことがございました。しかし、原子力の廃炉だけに限ってみると、ずいぶんといろいろな安全に関わる工学、高校生が十分学べる部分があって、出口のところも本気になって県が一緒になって考えていかなければ、エネルギー政策、研究構想、拠点化構想にも直接関係してくるわけですから、特徴を生かすとすれば、工業学科ではそういう道もあるかもしれないということは言えるかもしれません。

それから農業ですが、コシヒカリが生まれたのは福井県です。私は新潟の長岡生まれで、ずっとコシヒカリというのは新潟のものだと思っていて、福井に来てからショックを受けた次第でございます。福井県産であるということで。それから越のルビーもそうですよね。いろんなものがたくさんあります。だから、そういうものをバイオと結びつけたような農業を学ぶ拠点校を形成すると。そうすれば、自分たちがアップトゥデートの、トップレベルの学問を受けている、研究もやっているんだというようなプライドも持てるはずです。そういうような工夫がありうるかもしれません。他に何か、福井らしさということで、藤田先生、御意見はないでしょうか。

藤田委員　子どもたちに福井らしさを知らせるということについては、福井にはこういうことがありますということを知らせるということと、もうひとつは、地域、地元の特性。これは、子どもたちは身近に感じていますので、そういう部分で、地元の特性を踏まえた専門学科で学ぶということが大事だと思います。先ほどもお話がありました「食」ということにつきましては、今、嶺南では、特に小浜を中心に「食」ということについて、この数年来、いろいろなことを小学校時代から学んでいます。やはり、食の基本は農業と水産であると。前にちょっとお話しさせていただきましたが、今、水産・農業科の学校で欠けているのは何かというと、やはり「調理」ということです。ですから、そういう部分を入れることによって、農業・水産をより学びやすくするというようなことも考えるべきじゃないかなと思うんです。

それから、先ほど夢を語れとおっしゃられたのですが、私は水産高校の近くにおりますので、水産高校のことが非常に気にかかっております。水産高校につきましては、子どもたちがあまり行かないということで非常に問題になっていると思います。しかし、みんなの考えの中には、やはり水産は大事だと、大切だという意識は持っているわけです。これからの食料、そういう面に関して。そこで今、水産学校を発展的に解消させるというとおかしいですが、水産の学部が県立大学にありますけれども、いわゆる実務を学ぶ水産学科、２年間でもいいと思いますが、今の水産高校が、発展的にそのような形の学校になりうるのかどうか。もしなれれば、それもひとつの夢かなと思います。

私たちが一番気になるのが、若狭、特に上中から西の方に高等学校が３校あるんですが、現実に戻って大変申し訳ないのですが、３校のまま残るのか、２校になるのか、という話が地元から出てくるんですね。これはちょっと今の話とは別なんですけれども、こういうことについても、最後は考えなければいけないと思うわけです。子どもたちがどんどん減る中で、学校を縮小する、また数を減らすのか、小さな学校になっても３校のまま残すのかというようなことも、これから具体的にお話し合いをされたらどうかと。客観的に嶺北の方がどう思われるのかということも聞きたいですし。ただ、今光っているそれぞれの学校が、統合することによってお互いに足を引っ張り合って下がっていくということだけは避けたい。光をずっと保てるようにしていただきたいと思います。

福田会長　以前、これに近いような意見が出ましたね。水産高校の生徒数がだんだん減っており、例えば、他に学ぶべき数学や国語だとかを近くの他の高校と共同する、

それから、校舎はそのまま残して水産の実習はそこでやるというような意見が出たと思うんですね。そういう棲み分けをすることもひとつの高校連携という形になると。高校連携をやって、ある程度整理をするとしても、現在ある校舎を使わざるを得ないのではないかと。まったく新しい拠点校を作るというのもひとつの方向でしょうけれども、ある程度合理的に、現在あるものを使いながら拠点校を作っていくということも考えねばならない。しかし、カリキュラムの改訂とか、あるいは福井県で特徴的なものを生かしたものとか、今おっしゃったように地域の需要とかそういうものを生かした在り方とか、それぞれの重要性にかんがみた工夫が必要であろうとまとめることができると思います。単に生徒数が減ったから機械的になくして終わりということでは決してないということだと思います。

時間もだいぶ過ぎましたので、ここで、山﨑先生に御意見をいただいて、それから討論に入りたいと思います。

山﨑委員　夢のある学校像を目指して、これから福井県がどのように、どういう方向に進んでいくのかという方向での議論なんですけれども、私の方からいくつかの事例を紹介いたします。そうした事例の中から、夢と現実をつなぐ材料を提供できたらと思っております。なお、事例は３つで、お手元のプリントに裏表で印刷してございます。この３つの事例は、全国的な動きの中から、私がこれまでキャリア教育の研究のなどで訪ねたりした中で情報を得ている学校の中から選びました。全国的な動向については、本日の参考資料３のところにも掲載されておりますように、文部科学省が最近の特色ある学科等についてホームページに紹介しております。全国的なものは参考資料を見ていただきたいと思います。

それでは事例１、宮崎県の「佐土原（さどはら）高等学校」です。この学校はキャリア教育に非常に力を入れている学校で、私も注目していた学校です。専門学科６クラスで、現在合併して宮崎市になりましたが、もともとは佐土原町というところがございまして、そこには高校がなかったために、２０年前に新設をしたんですね。新設の理念としては、当初普通高校をほしいという要望があったんですが、地域的に経済的に貧しい家庭も多く、就職も考えなければいけない。そこで進学と就職の両方ができる専門高校を目指したというところです。それで、進学もできる専門学科という学校を作っていったわけです。現在、国立大学に２６名が合格しているという状況です。専門高校で、国立程度の、必ずしも国立がいいというわけではないですけれども、一応目安として２６名合格していれば、なかなか健闘していると思います。学科につきましては、従来の機械科とか、電機科とかいう学科をより広げて、共通ベースとしてコンピュータや電子情報の学習をする。その上で、電子なり機械なりを学習するということで、「電子機械科」、「通信工学科」、「情報技術科」、「産業デザイン科」という４つの学科を作っております。４番目の産業デザインというのがありますけれども、ただ単に手でデザインをするのではなくて、CG、コンピュータグラフィックですね。これを使ってデザインをしていく新しい学科を目指したものでございます。このようにして専門性を高い進学校的専門学科をつくり、また資料にありますように、非常にたくさんの資格を取得できるようにしたと。これは、就職を希望する生徒の地元企業への就職が非常に有利になるように、専門資格を持ってスペシャリストとして就職して生計を立てていく、そういうことを考えているわけです。取得できる資格ですけれども、いろんなものがあって、普通の学科よりも多いんですが、これは普通の工業高校であれば、ほとんどこれと同じくらいのものが取得できるようになっていると思うんです。福井県もまったく同じであろうというように思います。産業デザイン科の主任の方にも電話で聞いてみましたけれども、生徒が非常にがんばって、高校生の間にいろんな賞を受賞していると。２ページの上の方に

受賞等を若干上げましたが、これだけではなく、これの１０倍以上の賞を毎年受賞しております。それくらい特色を活かした活躍を高校生の間にしている。産業デザイン科につきましては、８割が女子で、将来そうしたデザイン系への進学が多いということでございます。この学校を例に挙げましたのは、今後、拠点校方式などを考える場合に、その拠点校の意味として、高校段階で完成させてしまうのか、あるいはさらに上級学校へつなげる形を考えた職業系の拠点校なのかということをしっかりと議論する必要があると思うからです。この学校は、進学と就職の両方に対応できる専門的なレベルの高い高等学校を作っていかねばならないという例でございます。なお、この佐土原高等学校は工業科でございますが、もちろん今後福井県を考える場合はこれを農業関係で作っていくなり、商業なり、場合によっては水産も考えていく、そうした対応も可能であろうと思います。

事例２は、農業高校を総合学科へ展開したものでございます。静岡県富士宮市の「富岳館高等学校」というところです。農業高校を平成１４年に総合学科に改組いたしました。総合学科というのは、御存知のように工業、農業、商業というような学科の区別を持たないわけですね。どちらかというと選択科目で選択をしていきますので、専門性としてはやや弱いといいますか、薄いわけです。この学校はもともと農業高校であるということを生かしまして、７つの系列のうち３つは進学対応、４つは専門知識タイプ、いわゆる職業系のことでございます。職業系につきましても、もちろん進学する生徒もおりますが、特に職業系の４系列を見ていただきたいのですが、「生物生命」は農業系を中心にしております。「建設インテリア」は農業土木、「情報ビジネス」は商業系を中心にして組織をしております。それぞれ特徴がありますが、２ページの一番下にありますように「生物生命」の中で本格的に農業を行いたいという生徒は、実際は専業農家の子弟は少ないそうで、県立の農業大学校がありますので、そちらへ進学して将来農業従事者になっていく。専門性の高い農業従事者、これは農業のリーダーですね、そうしたところを目指していくということでございます。農業関係ですけれども、最近、造園とか庭園関係も非常に重要な部門になっておりまして、生徒はそうした称号をもらって活躍しているということでございます。そのほか「建設インテリア」、これが農業土木の関係で、いろいろな選択科目があり、資格取得を目指して、４年制大学へも進学が可能であるということです。そのほか「健康福祉」等もあります。大事なことは、富岳館高校では１年時は進路が明確に決まっていないわけです。総合学科ですから、１年間かけていろんな体験をさせて２年時以降の選択科目、一部体験学習を１年生のときに行う。そして、いろんな進路指導をして適切な進路を選ぶようにしていく、その指導を非常によく行っていまして、生徒からも大変好評であり、生徒の満足度は非常に高い。今年の卒業生の決めた進路への満足度、進路満足度は９０％以上であるということでございまして、全国的に農業高校への不本意入学等のいろんな難しい問題があるわけですけれども、この学校につきましては、総合学科という形でその問題点を非常にうまく乗り越えているわけであります。進路未決定者、いわゆる就職浪人等もほとんどいないということであります。

次に事例３でございます。元は農業系と普通科を持っていた学校の改組の例であります。「塩尻志学館高等学校」、長野県塩尻市にありまして、私は、この学校の教頭先生と懇意にしておりますので、色々と改めて話を聞いてみました。平成１２年に塩尻志学館高等学校という新しい名称で改組しており、６クラスであります。なお、３つの事例全て６クラスになりましたが、私は前回までに１学年６クラスが望ましいということを言ったことがありますけれども、６クラスの学校だけを選んだことではなく、たまたまそうなったということです。さて、この学校は、先ほどの富岳館高校と同じような歴史を持っているんですが、若干異なっ

ておりますのは、地域の特性を非常によく残していることです。塩尻というところはワインの醸造の企業がいくつかあります。それを食品科学系列、ワイン醸造と微生物とを勉強する、そういう系列として選択ができるようにしております。また、国際文化とか情報とか国際情報に対応できるような系列も置いてあります。８系列をこの学校は置いております。そして、現在、芸術スポーツ系列を置いている、その辺が先ほどの富岳館高校とちょっと異なり、より教養性が高い系列を置いているわけです。反面、地域に特化した系列はあるものの、一般教養性も高いですから、職業系の特色というものは逆に薄れているというような特徴があります。この学校も、１年時から「産業社会と人間」という必修科目を学習して、１年間かけていろんな体験をさせてキャリア教育を充実させて進路を選ぶようにしている。やはりそれが生徒にも非常に好評で、先生方も指導を充実しているという印象でございました。また、学校間連携を大変熱心にしております。そこにありますように女子栄養大学・長野大学といった大学との連携、そして、近隣の高等学校や小学校との連携、そうしたものを行って、子どもたちがいろんな方面へ関心を持って、将来大学進学や地元への就職を適切にできるように配慮しています。進学ですが、ほぼ５０％が上級学校へ進学しております。そのうち国立は１３人であり、この学校にしますと、非常に高い数字であるということであります。総合学科になる前は、なかなか国立大学へ合格する生徒が少なかったということでございます。以上３つの総合学科、改組の事例、改組新設の事例を紹介いたしました。

私は、改めてこの３つの学校を調べまして、大変印象的だったことがあります。それは、どの学校の主任の先生も、「うちの学校は非常にいい」と言うことです。例えば、佐土原高等学校のデザイン科の主任の先生は、専門学科としての特性を強めて高いレベルの学習をするから非常にいいと。おそらく、総合学科のようなやり方では専門性が薄いからだめだろうということをおっしゃっておられました。ところが、総合学科の先生は総合学科の先生で、非常にこのやり方はいい、生徒の実態に非常に合っている。生徒は１年の間にきちんと進路を見つけて、そして選択も非常にうまく行っている。また、大学等への進学もうまく行っているというように、どの学校の先生も、基本的に非常にうまく行っているということを述べておりました。これは、おそらくひとつには生徒の目的意識が入学時点から非常にきちんとして入学してくる。例えば、総合学科ですと１年間かけてしっかりと進路を見つけて将来の進学や就職を考えて行こうというところ、入学の目的がしっかりとしているということがあると思います。そして、新しい学校の場合は、設備と教員の人事等もそれなりの配慮がございますので、熱心な先生方の指導が行われ、生徒が適切なところへ進学なり就職をしていく、そうしたいろんなことが功を奏して、それぞれの学校の反応が、非常にうまく行っているということになっていると思います。

補足としまして、最近の傾向について、４点ほど紹介させていただきます。そのうちの３つは最近の総合科学高校の事例でございます。非常に簡単ではございますけれど、川崎市立の川崎総合科学高校ほか、静岡県と東京都の科学技術高校と載せてありますが、これはいずれも工業高校の中に大学進学を考えた特別な学科を設定しているところであります。川崎市立の場合には理数科として、具体的には科学科として新設しております。静岡県の場合には理工科という学科を作っております。そして東京都の場合には、全てが大学進学を考えた工業系、理科系の学校であるということでございます。この東京都の学校の副校長さんが、私の大学の同期ですので、いろいろ尋ねましたところ、偏差値的には正直言って、真中より下の生徒が入学している。４５くらいだといっておりました。その生徒達が、大学進学を目指して学習することによって、６０％くらいが進学しているよ

うですが、国立大学をはじめ、中堅どころのいい大学へ進学もできていると。入学時点よりも伸びているということでございます。これは、総合的な理科系の進学を目指したカリキュラムの効果であると言っております。そのあたりは、これから新設高校を考える場合のヒントになろうかと思います。つまり、工業高校の場合でも、そうした大学との７年間のカリキュラムを考えた進学を目指したスタイルへの変貌を遂げつつあるというところが全国の事例の中で見て取れるわけです。４点目ですが、更なる特色化を考える場合に、いくつかの要素があります。ひとつは学校間連携。学校間連携といいましてもいろいろありまして、中高もあれば、近隣の高等学校同士、そして高大もあると思います。このうちの中高につきましては、ほぼカリキュラムの中で対応可能です。特別の制度を作ってもいいのですが、作らなくても、カリキュラムとか学校行事で可能でございます。しかし、高校間につきましては、制度的には非常にきちんとして、高大の場合は単位の履修等も高校生が大学の授業を受けて単位を得て、そして、大学の接続を考えていく。制度的なことも考えていくことが非常に重要であります。そして、２番目はインターンシップですが、特に就職を考えますと、地元の企業としっかりと連携して受け皿を作っておく、受け皿のひとつのきっかけとしておく。それから、資格取得も重要であります。そのほか、情報化・国際化も重要でありますので、例えば農業系でもコンピュータをしっかりと学習するとか、あるいは国際農業科など、そうした学科、あるいは科目をおいて福井県と外国との関係についてしっかりと学ばせていくというようなことも重要であろうと思います。以上、３つの事例と補足事項について説明させていただきました。

福田会長　　どうもありがとうございました。非常に分かりやすく事例を紹介いただいたのではないかと思います。これはまさに、今まで議論していたものがかなり詰まっていると言えるし、ある意味では夢がたくさんありますよね。しかし、藤井先生がおっしゃったように、これを実現しようとすると、県全体の中で、教える側の、教員の方の流れといいますか、そういうものをかなり考えてやらないと、実現はなかなか難しい部分があるというように言えると思います。しかし、この資料にあるのは、今まで委員の方々からいただいた御意見がかなり取り入れられているのではないか、かなり共通した部分があるのではないかと思いますが、馬場先生、何か御意見はございませんか。

馬場委員　　よくできた内容になっていると思いました。特に事例３ですが、１年次は「産業社会と人間」といういわゆる基礎知識といいますか、社会に出るための第一歩の知識というものを十二分に１年の間に学ばせる、そして、社会とはどういうものであるのか、人間関係とはどういうものであるのかという一般的・社会的なものをしっかりとそこで教えるというところに非常に興味を持ちました。やはりみなさんがおっしゃるように、プロフェッショナルとは何かというと、社会に出て仕事をする、生活をしていく、社会の一員となる、このことがプロフェッショナルでなくてはならないんだと思います。そういう意味での学校教育の在り方、そして、更に２年、３年と教育する中で、選択する仕事の中身の必要性とおもしろさ、夢というものをどう作り上げていくのか、そして企業に更にバトンタッチをしながら売り出していくという流れの構図を見出すことができるんじゃないかという思いがいたしましたので、非常に参考になりました。

福田会長　　ありがとうございました。吉田委員はいかがですか。

吉田委員　　お話を聞かせていただいて、子どもの数が減っていくという中で、奥越独自の

特色ある学校づくりのヒントが、この中にあるのかなというように思いました。

福田会長　　ありがとうございました。藤井委員、どうぞ。

藤井委員　　今、山﨑先生から御紹介いただいた学校は、大変魅力的で非常にすばらしいと思いました。新しく生まれたものもあれば改組されて変わった学校もあるわけで、生まれたきっかけ、変わっていくきっかけ、変えたものはなにか、生まれさせたものはなにかというのが非常に大事な点だと思います。静岡県立の職業高校はたくさんあるはずなので、それがどうなのかというようなことと、それから、こういう協議会レベルで話合いをさせていただけるようなものと、それから学校レベルのものと、また教育委員会レベルのものと、それから、地域とか、そういった全体を巻き込んでのレベルのものと、こういったすばらしい高校を福井県で生み出していく場合にどうするのか、その中でこの協議会としての役割はどうかということを考えていかないと、なかなか難しいと思います。今紹介していただいた高校が、どういうレベルでどういうように話し合われて、どう実現したのかということも少し御紹介いただけると、もっと分かりやすいかなと思います。

福田会長　　山﨑先生いかがでしょう。

山﨑委員　　新設改組の経緯に関わることだと思いますけれども、基本的にはどの県も少子化の中で高等学校の存続をどうするかということがたいへん大きな課題になっておりますので、名称はいろいろですが、福井県の協議会のような協議会を作って、その答申に基づいて、学校の統廃合を検討した上で、こうした新設や改組の学校ができあがってきていると思います。これは予算との関係があって、計画的に順次やっていきますので、静岡県ですと、ある年は富岳館高校ができ、大平台高校という農業系高校と昼間の単位制高校を統合した新しい学校を浜松市に作っております。年度ごとに進めていくという経緯です。

福田会長　　どうもありがとうございました。今の藤井先生の御質問にありました、ひとつひとつの高校についてここで議論することは不可能に近いと思うんです。だから、総合的に、こういう事例も含めて広く議論をさせていただいて、その中で地域の人の意見を吸い上げるなりして、県としてどうしていくのか、またそのためのいろんな新しいアイデアとか、希望とか、そういうものを熱く論ずるのがこの会合であろうと私は理解しております。その意味で、御自由に、全く違った意見でも構いませんと申し上げたのはそういうことでして、御自由に御意見を述べていただいたらと思います。杉田先生どうぞ。

杉田委員　　文科省の事例集、あるいは今ほどいただいた資料の中にも、何々デザイン学科というのがずいぶん多いんですけれども、若狭の塗り箸にしても、それから福井の繊維、めがね、いろんなものにデザインが大いに関連するので、きちんとしたデザインを学ぶようなコースもあるといいと思います。そこで思い出すのは、鯖江市が、かつてデザインの専門学校を作ったんですが、いろんな事情があってなくなったと。金井理事長がいらっしゃいますが、金井学園で高校のデザイン科というのを今もやっておられるんですね。そういうことで、県立においてもデザイン関係、あるいは今大学において若干問題になっているのは、観光学科ですね。福井県も観光に大変力を入れているんですが、こういうことを高等学校でも勉強するといいかなと。それと今、公立学校と私立学校との連携はやっているんでしょうか。こういうものができるといいと思うんですが。

福田会長　　金井委員、いかがでしょうか。

金井委員　　今のところはやっておりません。

福田会長　　今のところはないそうでございます。確かにそれもひとつの方法でしょうね。観光学科というのも確かにおもしろい意見だと思いますね。これから特に敦賀港などを中心にしまして、環日本海交流がもっと活発になっていくということから考えますと、観光という視点というのは、確かに福井県の特徴になるかもしれません。津田委員いかがでしょうか。

津田委員　　たくさんの御意見をお聞きしましたが、福井県の特色というものを、いわゆる農業にしても、嶺南と嶺北では違っており、そのようなものをそれぞれの高校が、どうニーズと合わせて、夢を語れるような学校にするのかを検討するいい時期だろうと思うんですね。ただ、今、この会として答申を出す時に、実施の時期を少しずつ明確にしていかないと。県下全部一斉にはできない。しかし「５年はあっという間に経つ」と前回会長がおっしゃられました。当然だと思います。福井県の状況を見ますと、生徒数の推移も各地区によってばらつきがある。当然生徒数の減少もバランスも、各地域によって非常に差がある。となると、５年、１０年、１５年をひとつの目途にして、再編なり統合なりについて、段階的に減少が大きいところから手をつけていくと。今御説明があった３つの事例を見ても、きっと県下全部じゃなくて、やはり非常に減ってくる地区に合わせて、改革しているんじゃないかと思うんですね。福井県もこういういい事例をたくさん見ながら、採れるところは採って、段階を踏んで取りかからなくてはならないのではないかと思います。会長がおっしゃるように、あっという間に５年が来て、どうするんだといってジタバタするのではなく、少しずつ進めないと、この会を何回開いてもどうかなと思います。

福田会長　　今おっしゃられたことは、確かにそのとおりだと思いますが、この会で、あまりにも絞りすぎた答申というのは、県にとっていいか悪いかはちょっと分からないですね。県の自由な発想もまた縛ってしまう恐れがある。むしろ、この会議においていろんな意見が広く出ており、いいアイデアを出すこと自体は、私は、我田引水ながら、ほぼ成功しているんじゃないかととらえているんですが、事務局いかがですか。

伊藤企画幹　　教育長がちょっと席を外しましたが、今、会長がおっしゃったとおりに、私どもも理解させていただいておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

福田会長　　それを聞いて安心いたしました。もうちょっと気楽に議論してもいいのではないでしょうか。確かに、５年があっという間に経つというのも事実だと思います。その緊急性が我々に課せられていることも事実です。従って、一生懸命に知恵を絞って、なんとか生徒さんに安心して行っていただけるような高校の在り方に関する案がひとつでも多く盛り込めて、その中から選んでいただけるなら幸せであるというように思います。その意味で、山﨑先生に提案していただいた事例は、いずれもそれぞれ特徴があって、我々も学ぶところが多いと思う次第です。今提案していただいた事例を中心にして議論を深めたいと思いますが、いかがでしょうか。

清川委員　　今の事例の佐土原高等学校と富岳館高等学校、これは全く新しい学校に作り上

げたんですね。

山﨑委員　母体は元の高校がございます。その校舎もそのまま使って、校名および校名と内部のカリキュラム組織を変更したというのが、事例の２と３です。

清川委員　ということは、名前も変わったんですね。

山﨑委員　名前も全く新しくなりました。

清川委員　事例の学校がうまくいったのは、おそらくそのことがあるからでないかと思います。元の形を壊して新しいものに作り上げることが大事だと聞いたことがあります。普通科でいいますと、藤島高校、高志高校、羽水高校、足羽高校などがありますが、先生をいくら替えても一緒だ、校風というのが根を張っているので、いくら優秀な先生をあちらこちら動かして固めても一緒、変わらないということを聞いたことがあります。もし、統合して作りかえるなら、名前も中身もみんな変えて、新しい学校として作り上げる、今までのいろんなマイナス面を全部消した学校として作り上げれば、おそらく事例の学校のようにうまくいくのではないかと思います。

福田会長　ありがとうございました。この事例のように、思い切って新しくするのも手でないかという御意見だったかと思います。金井先生いかがですか。

金井委員　先ほどからお聞きしておりまして、明日にでもうちの学校で取り入れたいようなプランばかりで、大変感心をしながら聞いていたわけでございますが、今、清川委員がおっしゃいましたように、確かに山﨑先生にお示しいただきました、３つの高等学校におきましては、いわゆる改組転換、スクラップアンドビルドの結果、こうした最終的な状況が得られているんだろうと思います。ただ、福井県にこれを持ってきたときに、果たしてどうなのかということを考えますと、先程、杉田委員もおっしゃいましたけれども、今後の協議事項にも関わってくることかもしれませんが、やはり、福井にとって望ましい、あるいはそれぞれの地域にとって望ましい県立高校に作り上げていくというのが、ひいては福井県の発展、福井県の産業界の発展につながるのではないだろうかと思います。そういった意味では、先程原子力の話が出ましたけれども、嶺南地域に１５基設置されている原子力発電所をどのようにしていくのか、特に福井県ではエネルギー開発拠点化計画というものもございますので、そういったことを考えると、嶺南の県立高校で原子力関係の学科を立ち上げるとか、あるいは、せっかく日本で初めての水産高校があるわけですから、その特色を生かして、もっとより広く、海洋系の学科を小浜水産に設置して、その他の県立高校ともなにかしらの連携をもたせるということが求められてくるのではないかという思いがいたします。

福田会長　どうもありがとうございました。やはり、福井県の特徴と結びつける必要があるということだと思います。他に御意見はありませんか。

吉川委員　今まで、専門性を深めることを中心にお話が展開していましたが、以前の会議の流れを考えますと、専門性を深めるのが１点、もう１点は、２、３つぐらいの学科の内容を学習するとのような話があったと思います。ただ、総合学科は、福井県ではなかなか成果が見えないんですね。これはお金があって、教員も施設もすべて県がバックアップし、しかも教員もその気にならないとやっていけない学

科なんです。ただ、それをやるとものすごいメリットが出てくるのは間違いないのですが、福井県ではその素地が薄いという気が若干しています。前に申し上げましたが、専門学科の中にいろんな学科をおいて、ある学科はほかの科目を少なく履修するけれど、ある学科は多くとるというような話ですね。例えば、農と商、農と工という話もでたと思いますが、その他の学科も考えられると思います。

専門性を追求する学校と、いくつかの基本的・基礎的なものを合わせて学習する学科が必要だと思います。といいますのは、社会がそういうものを求めている面があると思うからです。受け入れる企業内では、ひとつの専門分野だけを深く学んだ生徒、いくつかの分野を広く学んできた生徒を欲しいという場合があると思います。生徒も、そういうことを望んでいる場合があると思います。どういう就職先がいいですかと生徒に聞くと、以外に事務系とか現場系と言わずに、現場事務系がいいというのです。そうなると、何度か言っている農業と商業を併せてとるような学科がいいのではないかという考えが出てくるわけです。今、この会議の中で、小さい学校よりも大きい学校の方が、授業の選択科目の拡大とか、部活動を含めて活性化が図ることができるとの話がございました。そういう意味では、総合技術高校等が相当するわけですが、もうひとつ高校を考えるときに、小中高をいつも考えるのですが、小学校は近所のお子さんが隣のお子さんと遊ぶという感じ、中学校になると少し地域が広がって部活動等とか友達の友達と遊ぶということで、その中で、だんだん興味が人生観とか価値観に変わり、そこで、高校に入っていく流れだと思います。ですから、高校が小学校程度に小さいのでは、社会性も身につかないし、いろんなものの影響を受けたり、私はこれをやりたいという自己実現に対する欲求が沸きにくいと思うのですね。そういう面で、専門性も大事にしたいし、もう一方の総合技術高校みたいなものも大事にしたいと思っています。

福田会長　ありがとうございました。学校規模によるメリット・デメリットにつきましては、今日の参考資料１の１０ページにまとめて書かれておりますので、後で御参照ください。今日、山﨑先生に御提示いただいたのは、大体６クラスとなっています。これまで委員の方に御提案いただいたクラス数でもあります。これから５年１０年先を考えますと、拠点校に当たるもの、それに近いものなのかなと思います。これだけのクラスを目標とすると、当然、先生の負担も大きくなってきますし、いろんな専門家もそろえなくてはいけなくなりますから、全部が全部同じ形式でやるのは難しかろうと思います。いずれにせよ、いい案を出していただいたと理解しております。藤田先生、他に御意見はないでしょうか。

藤田委員　今いただいた学校の例をみると、福井県でも新しく統廃合をするときには参考になることだと思います。このようなことを参考にしながら、福井県の統廃合を考えていくべきだと思います。

福田会長　ありがとうございます。瀬尾先生いかがですか。

瀬尾委員　特に、静岡県の農業関係の学校の例を是非福井県でも取り入れていただきたいと思います。

福田会長　ありがとうございました。今までの議論を通しますと、出るべき意見はかなり出たのではないかと思います。先ほど調理の話が出ましたけれども、後は、その材料をどのように実際に当てはめて調理して、おいしそうに見えて、実際おいしいという料理を作るかという段階ではなかろうかと思います。今日、御提示され

たのは、まさにその雛形でありまして、こういうものを参考にしながら、将来を考えていく必要があろうかと思います。他に、全体を通して何か御意見はございますか。

杉田委員　民間の専門家の方々を講師としてもっと活用するということ、大学ではかなりやっているのですが、高等学校でも考えてみていいんじゃないかと。デザインのようなものですと、民間に優秀なデザイナーがたくさんいらっしゃるし、本当にレベルの高い専門家養成のためには、そういうことも考えるべきだと思います。

福田会長　これは、以前にも意見は出まして、そのときも例をあげましたが、福井大学では実際に大学院生にものづくりをさせております。例えばハンダ付けならば日本一、旋盤ならば誰にも負けないという職人さんを匠と称し、２０数人の方に後方支援を行っていただき、学生を手取り足取り教えていただき、非常に効果を上げております。そういう意味で、産学連携ということですね、高校と大学が連携する、高校と企業が連携する。ただ、企業の負担が大きくなる点を県として配慮していただく必要があろうかと思います。ただで講師を呼ぶわけにも行きませんし、非常勤講師を呼べば講師代がいるわけですから、そういうことの予算面の措置も考えながら、全体を考えていくことになろうかと思います。

本日は、時間厳守するように言われておりますので、まだ御意見等もあろうかと存じますが、一応議論を終わらせていただいて、司会を事務局にお返しします。

○閉　会

教育政策課長　貴重な御意見をありがとうございました。いつものとおり、本日の議事録につきましては、事務局で整理したものをホームページに掲載したいと考えておりますので、御了承のほど、よろしくお願いいたします。

次回につきましては、これまで皆様からいただいた望ましい高校の規模に関する御意見を整理させていただくともに、次のテーマであります「就学・就労形態等に応じた定時制・通信制課程の在り方について」に移っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

お手元に次回以降の会議開催のための日程調整表をお配りしてございますので、出欠に可能性等を御記入いただいた上で、事務局にお返しいただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

また、今後の資料の作成上、各委員に個別に御意見を伺いに行くこともございますので、御協力をお願いいたします。

それでは第５回の会議を閉会させていただきます。本日は、お忙しい中ありがとうございました。

以上